●選評

小島なお

・泰浜もとじ（神奈川県）

博物館で消えたいの？

ゆびとまばたき

じぶんで止めたのに

指先も動かさず、まばたきもしない博物館の陳列物。見る側から見られる側へ、意思を持って行くには「じぶんで止め」るしかない。

・からすまぁ（神奈川県）

美しい人の寝返り

終わるのだ

霜月

霜月のしなやかな肌の肉体。その身体はひとつきをかけて豊かな寝返りを打つ。はらはらと髪がはだれ落ちて、深い寝息がふたたび聞こえてきたら師走。

・小山桜子（東京都）

水鳥の夜におばあは透きとおる

水鳥はその身を水上に浮かべて眠るという。水面に映る虚像の眠り。おばあはいま、たとえば水上と水中の狭間の水面のような場所に遊んでいるのかも。

・深水葵（岡山県）

事件が起こらない恋愛映画
スマホに目線を移す
君がいる山
つまらない谷

君がいるのは代官山でもいいし、千歳烏山でもいい。私がいるのは渋谷でもいいし、雑司ヶ谷でもいい。君のいない谷底は、映画も恋愛もスマホもみな退屈。

・渡辺　あみ（東京都）

浴槽で東京のごと揺れる湯を
見つめる楽しみ　浸からない膝

東京で満たした浴槽。それは自分だけのあたたかく、やさしい東京。けれど、それが東京であることを忘れて全身で沈んではいけない。膝下ぐらいが丁度良い。

・加藤悠（愛知県）

ひとはみな
なんて今では言えないね
逢坂の関も壊されちゃったし

行く人も帰る人も、知る人も知らない人も、関がなければみな見えない他人となる。蝉丸は目が見えなかったけれど、逢坂の関が「みな」を見せていた。

・市庭麻（京都府）

特定の友人に向けた音たちを

五・七・五で世に出す遊び

「うた」の語源は「訴ふ」とも。どんな「音たち」にもほとんど意味はない。「特定の友人」であることが大切だから。五・七・五はかりそめの遊びに過ぎない。

・細村　星一郎（東京都）

目を閉じて

ハイブランドを集めてる

目を閉じることでハイブランドであることは無意味になる。けれど、そこにこそ集めることの真実がある。目を閉じて蒐集したものにこそ宿る無価値な価値。

・合川秋穂（京都府）

友達の友達　骨は嘘つかない

「インディアン（※今はネイティヴアメリカン）は嘘つかない」とは言葉の聖性を信じるフレーズ。では「骨」は。もっと即物主義的な現代の信仰を思う。

・鎌倉まくら（宮城県）

旧友は愚かピンク色の象か

「ピンクの象が見える」というのはアルコールや麻薬による幻覚症状の比喩。古い友人はかつての自分自身と不可分であるゆえに、「愚か」さは合わせ鏡になる。